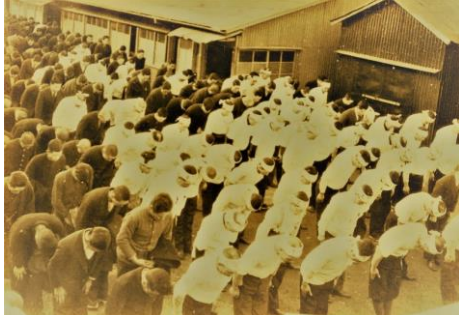


「上陸用舟艇」の謎

～社史のサイドストーリー（番外編）

これは、取手工場の前身である工場が東京都港区芝浦にあった頃の話です。

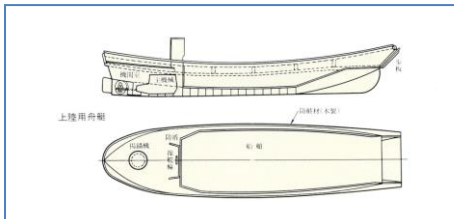
1941年（昭和16年）、当社芝浦工場は相模陸軍造兵廠そうへいしやうの管理工場となり、戦争が激しくなるとともに軍需工場関連の鉄骨製作に従事することが多くなりました。



朝礼の様子（1940年頃）

1943年（昭和18年）は、日本にとって戦局が悪化の一路をたどった年で、空襲に備えて上野動物園の猛獣25頭が処分されるという出来事もありました。その当時の当社は、受注工事はあるものの鋼材の入手が極めて難しく、それに加えて多数の社員が兵役に召集されて工場で働く人員が不足し、工場の稼働は危機的な状況にありました。

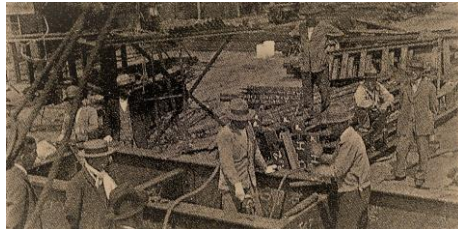
1944年（昭和19年）になると、鋼材の入手は不能となり、受注工事もほとんどなくなってしまいました。同年6月には、芝浦工場の“第3工場”は前年11月に発足した軍需省の管理下となり、相模原陸軍造兵廠からの指示で上陸用舟艇5艇を製作することになりました。ここでいう“上陸用舟艇”とは、人や戦車などを載せて短距離を航走する3～4tの舟のことで、長さ18m・幅4.5m・高さ4mほどの規模のものでした。



上陸用舟艇（大発動艇）



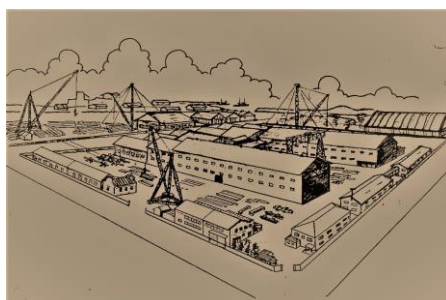
“上陸用舟艇”で使用する鋼板の板厚は3.2mmであり、当社の作業員は6mm以下の板厚のものを扱ったことがなかったため、月島にあった石川島造船所（日本初の民営の造船所。現IHI）から指導員を派遣してもらい、作業員に薄鋼板の歪取りや曲げ方などを教えてもらいました。また、当社には造船のノウハウがなかったため、当時の技術者は本屋で造船の参考書を買ってきて勉強したり、日立造船の因島工場まで出向いて教えを請ったりしたようです。



製作中（上陸用舟艇）

製作方法を模索するのと並行して、船舶を仕上げる機械類が不足していることが判明し、埼玉県川口市にあった閉鎖中の機械工場を買い取ったりもしました。そのような苦労を経て、1945年3月10日には甲板や防弦材などの木工部材を船に積んで芝浦工場に送り出す段取りとなっていました。その日に日付が変わったばかりの深夜に起こった東京大空襲により、清水組の深川木工所に依頼していた木工部材が全焼してしまい、舟艇としての仕上げができなままの状態を終戦の日を迎えてしまいました。

なお、終戦後しばらくの間、芝浦工場には軍需工場であった証拠となる上陸用舟艇が事務所脇の仮組場に横たわっていました。しかし、GHQに見つかっては大変なことになると考え、完成間近にあった5隻の上陸用舟艇すべてを大急ぎで解体してスクラップ処分にしたという記録が残っています。



当社芝浦工場のイラスト（昭和10年代）

こぼれ話①

上陸用舟艇は、軍用艦艇の一種で、上陸作戦に用いられる舟艇の総称です。その多くは、第二次世界大戦中のアメリカによって製造されました。日本でも、1925年以降、大日本帝国陸軍によって大発動艇（通称：大発）などが製造されました。

こぼれ話②

“大発”と呼ばれる旧日本陸軍が開発した上陸用舟艇は、1937年（昭和12年）の日華事変において大活躍し、世界の軍事専門家を驚嘆させました。

こぼれ話③

当然のことながら軍事機密扱いされていた“大発”ですが、盗撮などによりアメリカを初めてとする世界各国に模倣されました。第二次世界大戦の潮目を変えたともいわれる連合軍のノルマンディ上陸作戦で連合軍が使用した“ヒギンズ・ボート”と呼ばれるものも上陸用舟艇の一つでした。

こぼれ話④

1943年（昭和18年）10月には軍需会社法が公布され、当社にも徴用工が割り当てられて、学生や力士などが手伝いに来ていました。上陸用舟艇の製作時は、戦争の影響で工場の作業員は10人くらいしかおらず、学徒動員で来ていた早稲田大学建築科の学生たち（70人ほど）の手を借りて造っていました。

こぼれ話⑤

1946年（昭和21年）1月、上陸用舟艇をつくらせていた第3工場は進駐軍（アメリカ軍）に接收され、軍用資材の専用倉庫となりました。そこに格納されたものは小麦粉で、当時の社長の手記によれば、『従業員のため、置場の賃料代わりに小麦粉を配給して欲しいと再三交渉したが、駄目だった』とあります。なお、第3工場の接收が解除されたのは、1952年（昭和27年）6月のことでした。

【作成裏話】

戦後の1946年から1956年頃にかけて、アメリカ軍からの要請を受けて高架水槽をはじめとする軍関係施設を造ることが多かったのですが、戦時中は日本国内の軍需工場などの製造に携わることが多かったようです。

この「上陸用舟艇」も、軍需省からの要請の一つとして手掛けたものでした。

船舶製造のノウハウがない会社に、このような注文があったのは戦争末期の悲喜劇という感じがします。結局、「上陸用舟艇」は海に浮かぶこともなく戦争が終結したのですから、結果としては良かったと云えるのではないのでしょうか。

当時は大半の従業員が兵隊にとられていて、工場内は閑散とした状態であったようです。

そんななか、「上陸用舟艇」の製造に実際に携わったのは学徒動員された早稲田大学の学生さんや力自慢の力士（お相撲さん）たちでした。

なお、このコラムは諸般の事情により発行中止となった社内報（2020年7月号）に掲載するつもりでしたが、掲載の時期を逸したため“ボツ”としました。

しかし、せっかく作成したので、ここにお披露目させていただきます。（S.T）